招聘研究員

氏　　名	高　志明（GAO Zhiming）
所属機関等	北京師範大学　民間文学研究所
受入期間	2018 年 12 月 3 日～2018 年 12 月 22 日
指導教員	鈴木陽一（チューター：張　韜）
研究課題	日本の学者による中国西南少数民族神話研究史

傈僳族に関する神話の収集・整理史略

高　志明

傈僳族（リス族）は中国の南西部で暮らす少数民族の一つであり、70 万人強の人口を抱え、主に雲南省中西部、及び雲南省北西部に近い四川省の複数の県に分布している。傈僳族は国境を越えて広がる民族であり、雲南省傈僳族研究学会の資料によると、ミャンマーに 40 万人強、タイに約 8 万人が暮らすほか、南アジア・東南アジアの多くの国々にも分布し、全世界では約 128 万人が存在する。傈僳族は氐羌系の民族の一系統であり、彝（イ）、納西（ナシ）、哈尼（ハニ）、拉祜（ラフ）等の民族とルーツが近い。傈僳族の神話は、主にその史詩「創世記」の中で描かれている。本稿は百年以上にわたる各方面からの収集・整理の結果をまとめたものであり、物語を大まかに示すことで主な神話の筋を示す。

Ⅰ　英語資料に見られる早期の記録

1910 年、イギリス人のローズ（Archibald Rose）とブラウン（J. Coggin Brown）の共著である「ビルマ・中国国境の傈僳族」（Lisu（yawjin）Tribes of the Burma-China Frontier）という文章が、「ベンガル型アジア社会の回顧録」（Memoirs of the Asiatic Society of Bengal）の出版により、注目を集めた。ここでは中国・ビルマ国境付近の傈僳族のありさまが反映されており、「傈僳人的起源故事」（Legend of the Origin of the Lisu Race）に焦点を当てた一節がある。

太古の昔、人類が神の怒りに触れた際、神はかぼちゃの栽培をしていた一人の人間を選び、ひょうたんの種を彼に与え、それを植えさせた。ひょうたんが大きく生長した頃、大雨が降り続き洪水が発生し、世界全体が水没してしまった。彼は妹を連れて、その大きなひょうたんの中に身を隠した。水が退いた後、世界の人々がすべて死んでしまったことに気が付いた二人に、夫妻としての契りを交わそうという思いが頭をよぎったが、やはりそれは不適切にも思えた。話し合いの結果、「この命は神様のひょうたんに救われたものだから、結婚するにしても神様の判断を仰ぐ必要がある」と考えた。二人は、真ん中に軸のある丸砥石を一つと真ん中が空洞となっている丸砥石を一つ、合わせて二つを持って山に登り、天に向かい祈った。「丸砥石をそれぞれ山の頂から転げ落とし、もしその二つが一つに合わさることができたなら、それは神様が我々の結婚に同意したということだ」。転がり落ちた二つの丸砥石は思ったとおり一つに合わさったため、二人は結婚し、九人の子どもを産んだ。九人の子どもは成長した後にそれぞれ別の場所へ移り住み、さまざまな民族が生まれ育っていった。

これは、現在発見されている傈僳族に関する神話テクストの中では比較的早期のものであり、ここで描写されている「大洪水」、「丸砥石転がし」、「兄と妹の結婚」などのモチーフは、その後の文献においても常に登場している。

Ⅱ　汪忍波が自らの民族文字で行った記録

1920 年代、傈僳族の汪忍波が自ら創作した音節文字により記録した「祭天古歌」には、神話の内容が含まれている。

さまざまな原因により、音節文字の資料はその完成後に散逸が続いた。1982 年にこれを専門的に収集・整理

する者が現れ、1999 年にやっと 16 の祭天古歌が一冊の書籍として編集された。2013 年には、「雲南少数民族古籍珍本集成」が出版され、音節文字が見られる木板や紙片等の実物の写真が公開された。2017 年、最終的に 24 すべての古歌を収録した「傈僳族音節文字文献訳注・祭天古歌」が出版された。

音節文字による記載の中には、以下のような神話がある。人の祖である「里俄」と神様である「烏薩」の娘「載恒咪」は夫婦として結ばれ、二人は天から地上へと居を移し、二人の息子と一人の娘を生んだ。長男は「米斯」といい、野外の山林や鳥獣を管理した。二番目の長女は「陸瑪」といい、龍王に嫁ぎ、河川・湖・海等の水域をつかさどった。彼女の子は「以独斯」といい、河川の水源をつかさどった。三番目の次男は「措咱」といい、家で父母を養いつつ、田畑を耕し家畜の世話をした。後に「措咱」は五人の息子を生んだが、どの子も言葉を話すことができなかった。神様からの指示を受けた天祭りの後、五子はそれぞれ傈僳語、漢語、チベット語、納西語、白族（ペー族）語を用い、「馬が野菜を食べた」とそれぞれ話した。ここからさまざまな民族が発展していった。

「祭天古歌」には以下のような神話がある。太古の昔、天空に赤、黄、青、緑、花、灰、黒の七つの太陽が同時に現れた。一方、夜には七つの月が現れた。昼間は極めて熱く、万物が焼け焦げ、夜は極めて寒く、世界に残ったのは骨と皮だけとなった人類と一部の動物のみであった。世界を救うべく、「桑丹」という名の一人の英雄が、草で作った矢羽、ヨモギの茎で作った矢じり、ランの糸で作った弓弦で、古くなり衰退した太陽と月を撃ち落とした。そして塩と聖水を探し、それらから流れ出た血を洗い落とし、それらをヨモギとメドキを敷いた地面に埋め、最後に自ら太陽と月を一つずつ作り上げ、天に掛けた。

III　陶雲逵による漢字を用いた記録

漢字により傈僳族の神話を記載したもっとも早期の文献は、1930 年代の陶雲逵によるものである。

陶雲逵の「雲南におけるチベット・ビルマ語派の原住民族の創世故事（原文：几個雲南藏緬語系土族的創世故事）」（1935）には、傈僳族の神話が三つ記載されている。これらの神話は後に、陶による民族誌の著作である民族志「碧羅雪山の栗粟族（原文：碧羅雪山之栗粟族」（1939）にも収録されている。

一つ目の故事は以下のとおりである。大洪水の後、兄と妹の二人だけが残された。二人は一匹の犬を連れ、崖の洞窟に身を寄せたが、食料がないため、犬を送り神様に乞うた。神様は食料を犬の耳の中に入れ、犬が戻り頭

2017 年 新版 祭天古歌

を振ると、すべての種が地面に落ち、あらゆる食料が芽を出した。そのうち一つの瓜の苗から大きな瓜が育ち、中から人の声がした。これを恐れた二人が神様に救いを求めると、天から一本の刃物が落ちてきたので、これを使い瓜を開いた。すると瓜の中から人が五人飛び出してきた。三人は色が白く、後に傈僳人となった。一人は色が黒く、現在の納西人となった。もう一人は羽を備えており、山へ飛んで行き亡霊となった。その後、天から遣わされた一人の神様が文字を教えに来た。三人の白い人間は皮の上に文字を記し、黒い人間は石の上に文字を記した。神様が文字を伝え終えると、彼らはそれぞれ各地に散った。三人の白い人間は道中空腹を満たすために皮を食べてしまったため、傈僳族には文字がなくなった。

二つ目の故事は以下のとおりである。洪荒の世に、三代の人間がいた。一代目はわずか五寸の身長で、何も成し遂げることなく滅びた。二代目は約一尺の身長で、後に洪水で滅びた。三代目は魔王により苦しめられ、山林に逃げ込み猿となった。その後、一人の神様が下界に降り、大きな瓜を一つ植えた。それがさまざまな方向から割れ、亡霊、狼、蛇がそれぞれ飛び出し、最後に二つに割れると、男の赤子と女の赤子が一人ずつ見つかった。兄と妹が大人になった後、神様は丸砥石を転がす形で二人に結婚を促した。二人は結婚後、男の三つ子を産んだ。長男は官吏に、次男は祈禱師に、三男は職人となり、その後三人とも平民の女子と結婚し、人類は子孫が栄えていった。

三つ目の故事は、神匠が木を削り人形を作ったところ、人のように自在に動き、その後山に入り猿との間に

人を産んだというものである。

Ⅳ　張征東の記録

1945 年、張征東は「傈僳族社会の歴史調査（原文：傈僳族社会歴史調査）」を完成させ、多くの神話テクストが収録された。また、傈僳族の神話を専門的に紹介した「人類の起源についての傈僳宗族の伝説（原文：傈僳宗族之人類来源伝説）」を、1947 年の「辺疆服務」第 24 号にて発表した。

主な神話には以下のものがある。

1、創世神話は陶雲逵が記述したものとほぼ同様であり、引用した可能性がある。

2、傈僳族の起源に関する伝説は数多く存在する。以下にその二つを挙げる。

（1）呪いにより天地が分離し、大洪水が発生した。水が退いた後、太陽は傷を負い姿を見せなくなった。人もその他の動物も、太陽に重い腰を上げさせることはできなかった。ただ雄鶏だけが木をつつき誓いを立て、太陽に再び姿を現すよう求めた。とさかには木をつついた際の痕が残っていた。その後五穀豊穣を迎えたが、人々はそのありがたみを理解せず、神様の怒りを招いた。神様は五穀を回収し、呪いにより小麦粉を白雪に変え、飢えと寒さにより人類を懲らしめた。その後、神は飢えた犬を見てかわいそうに思い、一本の稲穂と一本のトウモロコシを授けた。人々はこれをもとに農作物を育んだが、もとのような豊作に恵まれることはついになく、駆けずり回るようにしてやっと生きていくことができた。

（2）洪水が起こり、兄が死に、弟が生き残った。弟は後世において「おじいさん」と呼ばれることとなる。「おじいさん」は後に天女を娶り、一子をもうけた。まもなく天女は里心がつき、泥をこねて女性を作り、父子に付き添わせ、自らは天上へと帰って行った。人類の祖が泥でできた人の乳を飲み成長したため、後世の人間の体からは常に垢が出るようになった。その後、父子が植えた大きなかぼちゃが割れ、三子を得たが、どれも口をきくことができなかった。「おじいさん」は神様のお告げを得て天を祭り、その際、神様は蛙に姿を変えてそばから見守っていた。祭りが終わると、動物が供物を横取りしに来た。三人の子どもは智慧の水を奪って飲み、話すことができるようになった。動物は嫉妬し、人間を噛んだ。神様は人間をわきの下に挟んで守り、人間の体毛は頭髪以外すべてかじられてなくなってしまった。

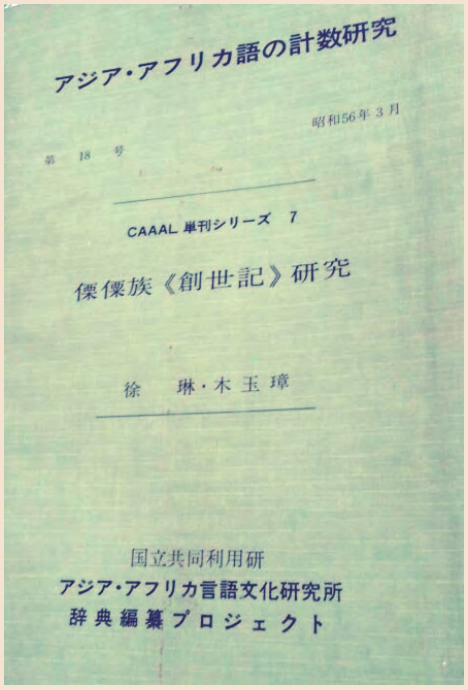
Ⅴ　木玉璋による収集・整理及び翻訳

1965 年、傈僳族の学者である木玉璋は、裴阿欠老人の歌と語りに基づき、よく見られる「創世記」を記録し、漢語に翻訳した。

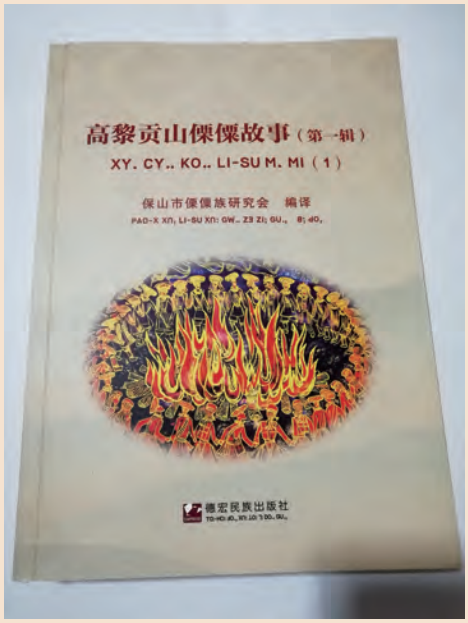
1980 年 怒江州内部資料

木玉璋が収集・整理した「創世記」2004 年再版

この「創世記」は 1980 年 9 月の「怒江州文史資料集」において初めて披露された。またそれとほぼ同時に、日本へと持ち込まれた。1980 年に日本での学術交流に参加した徐琳は、「傈僳族の『創世記』に関する研究（原文：傈僳族「創世記」研究）」というテーマで発表を行った。その際、日本の学者である君島久子が日本語への翻訳を申し出て、白鳥芳郎がその出版を賛助した。また、東京外国語大学の中島幹起教授と辻伸久博士は、これを英語に翻訳したいと考えた。1981 年 3 月、「傈僳族の『創世記』に関する研究」の日本語版と英語



傈僳族「創世記」が日本で刊行



傈僳族研究会による民間文学収集の一つ

版が日本で上梓された。

「創世記」の主な内容は以下のとおりである。世界で最初の創造者及び発明者は猿猴と野ネズミであった。人類には生と死があり、世代交代は自然なことである。人類はまず野火を発見し、その後、火の使い方を覚えた。傈僳族は、最初に文字を記録した獣皮が腐敗した上、犬に食べられてしまったため、文字を持たない。人類が過度に繁殖した後、不調和が生じ、破滅的な災害に見舞われた。ある兄と妹（来洒と奇洒）がひょうたんに身を隠して難を逃れた。兄と妹は手分けして人類を探したが、見つかることはなかった。二人は「麻糸玉射ち」、「針の穴射ち」、「丸砥石転がし」といった試練を乗り越えた。天からの許可を得た二人は結婚し、再び人類の子孫を繁栄させた。

1980 年以後、中国は新たな時代に突入し、収集・整理に参加する主体が多様化した。こうした主体はおよそ四つのレベルに分かれる。第一に、国レベルでの収集がある。これには主に、「民間文学三套集成」、「中国少数民族民間文学叢書・故事大系」に属する「傈僳族民間故事選」、及び「中華民族故事大系」、「中国各民族神話」、「中国少数民族文学」、「中国少数民族神話選」等がある。第二に、雲南地方での収集がある。これには主に、「傈僳族民間故事」（1984）、「深山夜話・怒江各民族民間故事選」（1981）、「雲南少数民族神話選」（李子賢主編　1990）等がある。第三に、雲南傈僳族研究会及びその分会による収集がある。これには例えば、「麗江傈僳族民間故事選」（2014）、「高黎貢山傈僳故事　第一巻」（2017）等がある。第四に、個人による収集・整理がある。例えば、張自強の「傈僳族阿考詩経」（2004）及び「傈僳族祭祀経」（2006）、李自強の「三江奇韵」（2005）及び「三江神韵」（2008）、胡万才の「傈僳族民間故事選集」（2017）等がある。

傈僳族神话收集整理史略

北京师范大学文学院　高　志明

傈僳族是生活在中国西南部的一个少数民族，人口有 70 多万，主要分布在云南省中西部，和四川省临近云南西北部的几个县。傈僳族是一个跨境民族，根据云南省傈僳族研究学会的资料，缅甸约有 40 多万，泰国约有 8

万，此外在多个南亚、东南亚国家都有分布，全球总共约128万人。傈僳族是氐羌系民族的一支，与彝、纳西、哈尼、拉祜等民族族源较近。傈僳族神话主要包含在其史诗“创世纪”中，本文梳理了一百多年来各方收集整理的结果，并以“故事梗概”的方式简单呈现主要的神话情节。

一、较早的记录出现于英文材料

1910年，由英国人罗斯（Archibald Rose）和布朗（J. Coggin Brown）合写的《中缅边境之栗粟》（Lisu (yawjin) Tribes of the Burma-China Frontier）一文，随着《孟加拉型亚洲社会回忆录》（Memoirs of the Asiatic Society of Bengal）的出版得以面世。在该篇反映中缅边境傈僳族风貌的文章中，有一节专门讲了“傈僳人的起源故事”（Legend of the Origin of the Lisu Race）：

远古之时，人类触怒了天神，天神就选了一个种南瓜的人，给了他一粒葫芦种子让他种下去。等到葫芦长大，大雨下个不停，形成洪水，淹没了整个世界，种瓜人带着他的妹子躲进了大葫芦。洪水退后，他们发现世人都死完了，二人就萌生了结为夫妻的念头，可是又以为不妥，经过商议认为：性命是天神的葫芦救下的，能否婚配也要请天神决断。他们带着两个磨盘爬上山顶，一个磨盘中间有轴，另一个中间空着。他们向天祝告：各自把磨盘从山头滚下，如果两扇能合在一起，就说明天神同意他们结婚。当磨盘滚下，果然合在了一起，于是他们就结了婚，并生了九个儿子。这九个儿子长大后，分移出去，繁殖成各种民族。

这则神话是目前所见较早的一个傈僳族神话文本，其中所述的“洪水滔天”“滚磨盘”“兄妹婚”等母题，在之后的文献中经常出现。

二、汪忍波用本民族文字做的记录

1920年代，傈僳族人汪忍波用自创的音节文字记录下了“祭天古歌”，里面包含了神话的内容。

受多种原因影响，音节文字材料从产生后便不断散佚，直到1982年才有人专门搜集整理，1999年才有16部祭天古歌编定成书。2013年，《云南少数民族古籍珍本集成》出版，一批载有音节文字的木板和纸片等实物的照片得以面世。2017年，包含完整24部古歌的《傈僳族音节文字文献译注·祭天古歌》最终出版。

在音节文字的记载中，有神话如下：人祖“里俄”与天神“乌萨”之女“载恒咪”结为夫妻，二人从天上迁居到地上，生了两男一女。长子叫“米斯”，掌管野外山林及禽兽；二女叫“陆玛”，嫁与龙王，司江河湖海等水域，她的子女叫“以独斯”，司江河的水源；幼子叫“措咱”，在家赡养父母，并耕种田地饲养禽畜。之后，“措咱”生了五个儿子，但都不会说话，经天神指点祭天后，五子分别用傈僳语、汉语、藏语、纳西语、白族语说出了同样的一句话：马吃菜了，从此发展出了不同的民族。

在“祭天古歌”中有这样的神话：远古时候，天空中同时出现了红、黄、蓝、绿、花、灰、黑七个太阳，晚上则有七个月亮，白天极热，烤焦了万物，晚上又极冷，世上只剩下骨瘦如柴的人类和一些动物。为了解救世界，一个名为“桑丹”的英雄，用蓍草做箭羽，蒿杆做箭镞，兰线做弓弦，将这些坏了的、衰老的太阳和月亮射落，然后找来盐和圣水，洗净它们流出的血，再将它们埋在蒿子和蓍草地里，最后又自己造了一个太阳和一个月亮挂在天上。

三、陶云逵用汉字做的记录

最早以汉字记载傈僳族神话的文献，是陶云逵1930年代的著述。

陶云逵的《几个云南藏缅语系土族的创世故事》（1935），记载了三则傈僳族神话，这三则神话后来又被收入其民族志著作《碧罗雪山之栗粟族》（1939）之中。

第一个故事讲到：洪水滔天之后，仅剩兄妹二人，他们带着一条狗栖身在崖洞内，因没有粮食，派狗向天神讨要。天神将粮种放入狗耳，狗回来后一摇头，所有种子落地，粮食齐出。中有一根瓜秧，结了一个很大的瓜，内有人声。兄妹惧怕而向天神求救，从天上落下一把刀，二人用刀把瓜砍开。五人从瓜里跳出，三个白的，就是后来的傈僳人，一个黑的，就是现在的纳西人，另有一个带翅膀的，飞到山上变成了鬼。后来天上派一神下来教人识字，三个白的将字写在皮子上，那个黑的将字写在石头上，天神传授完文字，他们也各自走散，三个白的因路上饥饿把皮子吃了，所以傈僳族没有文字。

第二个讲的是：洪荒之世，人有三代，第一代身高仅五寸，无力建功而灭；第二代人身高约一尺，后灭于洪水。第三代人，受魔王折磨，逃入山林成猴。后有一天神下界，种出一个大瓜，从不同的方向割开后，分别跑出了鬼、狼、蛇，最后剖为两半，得男娃女娃各一。兄妹长成后，天神用滚磨盘的方式促其结婚。兄妹婚后一胎生三男，老大为官，老二为巫师，老三为工师，后三子与民女结婚，人类得以繁衍。

第三个讲的是，神匠削木为偶，活动如人，后木偶入山与猴子结合生人。

四、张征东的记录

1945年，张征东的《傈僳族社会历史调查》写成，收录了多个神话文本。他还有一篇专门介绍傈僳族神话的《傈僳宗族之人类来源传说》，发表于1947年的《边疆服务》第24期。

其主要的神话有：

1、创世神话一则，与陶云逵所记大体一样，或有借来之嫌。

2、本族来源传说多则，其中两则如下：

（1）天地因诅咒分离后引发洪水滔天，洪水退后，太阳受伤不出，人与其它动物均请不动太阳，唯公鸡刻木为誓方请其复出，鸡冠便是木刻的痕迹。此后，五谷丰盈，而人不知珍惜，惹来神怒。神将五谷收回，将面粉诅咒成白雪，以饥寒惩罚人类。后来，神见狗饿得可怜，赐它一穗稻谷、一把玉蜀黍，人们借此繁育出庄稼，但是所结之籽终没有原来的丰硕，人需奔波一世才能过活。

（2）洪水到来，兄死弟存，弟即为后世之“爷爷”。后来“爷爷”娶得天女，生得一子。不久天女思家，遂用泥捏一女人陪伴父子而自返天上。因人祖食泥人乳汁长大，故后世人身上常有泥垢。再后来，父子种出大南瓜，剖得三子，但均是哑巴。“爷爷”得神谕而祭天，祭时天神变成青蛙在旁监视。祭毕，动物来抢祭品，三童子抢饮智慧之水而能说话，动物嫉妒来咬人，天神将人挟于腋下保护，人身上毛都被咬去，只剩头发。

五、木玉璋的收集整理和翻译

1965 年，傈僳族学者木玉璋根据裴阿欠老人的唱述记下了常见的《创世记》，并翻译成汉语。

该版《创世记》首先出现在 1980 年 9 月的“怒江州文史资料集”中，几乎同时，它也到了日本。徐琳于 1980 年到日本参加学术交流，以“傈僳族《创世记》研究”为题做了发表。当时日本学者君岛久子提出要把它翻译成日文，白鸟芳郎赞助其出版，东京外国语大学中岛幹起教授和辻伸久博士欲将之翻译为英语。到 1981 年 3 月，日文版和英文版的“傈僳族《创世记》研究”便在日本面世了。

《创世记》的主要内容有：世界最早的创造者和发明者是老猿猴和老野鼠；人类有生有死世代更迭是自然之事；人类先发现野火然后学会用火；傈僳族因最初记录文字的兽皮腐烂和被狗吃掉而没有文字；人类繁衍太多后产生不和谐而遭到灭顶之灾；一对兄妹（来洒和奇洒）躲在葫芦里得以存活；兄妹俩分头寻找人类未果；二人通过射麻团、射针眼、滚磨盘等测试；兄妹得到天意的许可而结婚并重新繁衍人类。

1980 年之后，中国进入新时期，参与收集整理的主体多起来，他们大体可以分为四个层次：第一，国家层面的收集。主要有“民间文学三套集成”，和作为“中国少数民族民间文学丛书·故事大系”一员的《傈僳族民间故事选》，以及《中华民族故事大系》《中国各民族神话》《中国少数民族文学》《中国少数民族神话选》等。第二，云南地方的收集。主要有《傈僳族民间故事》（1984），《深山夜话·怒江各民族民间故事选》（1981），《云南少数民族神话选》（李子贤主编，1990）等。第三，云南傈僳族研究会及其分会的收集。比如《丽江傈僳族民间故事选》（2014），《高黎贡山傈僳故事．第一辑》（2017）等。第四，个人的收集整理。如张自强的《傈僳族阿考诗经》（2004）和《傈僳族祭祀经》（2006），李自强的《三江奇韵》（2005）和《三江神韵》（2008），胡万才的《傈僳族民间故事选集》（2017）等。